島に就いて生きていく。

就職って言葉がキライだった。

学校を卒業して大人になるってことが、
なんだか自分の可能性を諦めて、
ほんとの自分を隠して我慢したり、
どこかで誰かのせいにしたり、
自分の大切なものを自ら捨ててしまうんじゃないかと怖かった。

高校生のとき、わたしは島で一番好きだった風景を失った。

この日をきっかけに、地域をよりよくする為の
デザインに関わりたいと思い始めたのだけれど、
どんな仕事に就いたらいいのか分からずに悩んでいた。

ある日の夕方、
「ケンタ、地域をデザインするってのは、職業のことじゃない。
きみ自身の生き方のことだよ。」
って、教えてくれた大人がいた。

だから就職ってのは、職に就くことではなく
自分の人生を生きることなんだと思えるようになった。
地域をよくするためにやるべきことは、
自分自身の人生をよりよく生きることなんだって。

だから、まちにとって必要だと思うことをしたらいいし、
そのわたし自身の生き方が、まちの風景になっていく。

少年時代に失った風景に憧れて、
その暮らしと風景を取り戻すように、
何者でもないわたしは、今日も生きていく。

わたしは、わたしの人生を島で切り拓いていく。
島に就いて生きていく。

island company 山下 賢太

1985年生まれ、鹿児島県薩摩川内市の上甑島出身。東シナ海の小さな島ブランド株式会社（island company）創業者。人口200人の集落を舞台に、地域固有資源の再編を通じたデザイン経営と、地域資源が循環するしあわせなもの・コトづくりに取り組んでいる。

わたしが
島を選んだ理由

家業の継承

祖父が創業した菓子処を継ぐために
東京や海外で経験を積み帰郷 - P.12

酒井 通雄 さん（種子島へUターン）

家族の看護

屋久島にいる父ががんを患い、
島に帰ることを決意 - P.22

竹之内 沙弥 さん（屋久島へUターン）

ライフスタイルの見直し

働き詰めだった日々から
ゆとりあるライフスタイルに憧れて - P.15

和田 智奈美 さん（種子島へUターン）

都会での暮らしに疲れを感じ、
サーフィンでよく訪れていた種子島へ - P.29

小早 太 さん（種子島へIターン）

地元への愛着

島外での就職も
考えたものの、
慣れ親しんだ地元で
働きたいと島内で仕事を探し、
面白そうな会社を見つけた -P.10

桑原 駿一郎 さん（種子島へUターン）

大学進学をきっかけに
一度は島を出たものの、
島に帰ってきたかった -P.16

古市 寛明 さん（種子島へUターン）

地方創生

島外で経験したことを生かし、
地元の地方創生に取り組みたい - P.21

寺田 元 さん（種子島へUターン）

自然環境

屋久島の自然や島の生活、
ネイチャーガイドの仕事が
自分が本当に求めていたことだと気付いた -P.28

渡邊 太郎 さん（屋久島へIターン）